

徳島大学における学習支援 Study Support Space の充実に向けて ～運営する学生サークルにできること～

大槻智一¹⁾、一居航平¹⁾、藤原誠哉¹⁾、中井秀和¹⁾、向井将馬¹⁾、
山本 豪²⁾、遠藤博文²⁾、塩川奈々美³⁾、吉田 博³⁾

1) 徳島大学理工学部 2) 徳島大学附属図書館 3) 徳島大学高等教育研究センター

1. はじめに

中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」が発表されて以降、大学教育においてアクティブ・ラーニングが強く推進されるようになった。このような背景のもと、大学図書館においても、学生のアクティブ・ラーニングを支援するために学習・教育支援機能の強化について検討されるようになった¹⁾。徳島大学附属図書館においてもラーニングコモンズが設置され、2013年度より学習相談 Study Support Space（以下、SSS）が開設された²⁾。これらの取り組みは、徳島大学の第3期中期目標・中期計画に基づいており、大学として戦略的に推進している取り組みといえる。特に、SSSの運営は徳島大学のサポート系サークル「学びサポート企画部」に所属する学生と図書館職員の協働によって行われている。学習支援において、大学図書館と学生が協働することの意義について、学生視点からの支援ができるなどの可能性や重要性が指摘されている^{2,3)}。しかし、我が国においては、現状として珍しい取り組みであるといえる³⁾。

そこで、本研究は、SSSのこれまでの成果や課題を整理するとともに、徳島大学における学習支援をさらに充実させるために、SSSを運営する学びサポート企画部の学生が取り組むべき課題を明らかにするものである。

2. 学びサポート企画部

学びサポート企画部は、「大学生の日々の学習における躓きに対して、学習支援を行うとともに、学習をするために必要な基本知識・技能を習得する機会を創ることで、大学生の学習スタイルの向上、改善を行う」という理念のもと、学生15名

と図書館職員2名、教員2名(2019年11月現在)で活動している。大学図書館と協働して、SSSの運営の他に、留学や卒業研究などをテーマとした学習関連のイベントを企画・開催している⁴⁾。

3. Study Support Space

SSSは、学生の学習に関する相談に教員、大学院生がアドバイザーとして対応する取り組みで、SSSの時間割に合わせて附属図書館1階のピア・サポートルームにて学生の相談に対応する。2013年4月より開催し、2019年9月末の時点での累計相談者数は2,820名である(表1)。相談内容の内訳をみると、学習相談の件数が2,275件で、全体の約8割を占めていることがわかる。さらに、学習相談の件数は増加傾向にあることから、SSSは徳島大学において、学生の学習相談の場としての役割を担っているといえる(表2)。また、これまでのSSSに関する研究においても、SSSは相談者にとって、学習内容の理解、学習意欲の向上や能動的学習への転換、視野の広がりなどに影響を与えていることが明らかになっている⁵⁾。さらに、アドバイザーにとっても、教員は自身の授業へのフィードバックに役立てたり、大学院生は知見の広がりや思考の整理など、自分の学習に対する理解にも影響を与えていることが明らかになっている⁵⁾。

表1 SSSの累計相談者数(2019年9月末現在)

年度	実施日数	前期相談者数	後期相談者数	累計相談者数
2013	153日	210名	142名	352名
2014	151日	180名	214名	746名
2015	150日	150名	139名	1,035名
2016	140日	219名	98名	1,352名
2017	150日	217名	175名	1,744名
2018	150日	367名	347名	2,458名
2019	75日	362名	—	2,820名

表 2 相談内容の内訳 (件数)

年度	学習相談	学習以外の相談	その他・雑談	合計
2013	225	72	55	352
2014	253	99	42	394
2015	196	83	10	289
2016	277	40	0	317
2017	331	58	3	392
2018	663	47	4	714
2019	330	32	0	362
合計	2,275	431	114	2,820

※2019年度は前期のみの数値である

※学習以外の相談として、留学、進路、課外活動、文献検索などが当てはまる

4. SSS 運営上の課題

現状の SSS における運営の課題として、次の 2 つを挙げることができる。

1 つ目は、相談内容が偏っていることである。図 1 は、2019 年度前期の相談内容の内訳を示している。このデータから、物理の相談が 77% (279 名) であり、学習内容以外の相談も合わせると、物理以外の相談は 23% (83 名) であった。2019 年度前期に「物理」の相談対応を行った時間帯は 37 時間であったことから、1 時間当たり 7.54 名の相談者が訪れていることが分かる。一方、物理以外の相談対応を行った時間帯は 113 時間であったことから、1 時間当たり 0.73 名の相談者が訪れていることが分かる。これは、ニーズの偏り以上に時間割の偏りが大きいと考えている。実際に、一週間の間に、物理は 4 時間の相談枠があるのに対し、物理以外の科目では各科目 1、2 時間程度である。幅広い科目のアドバイザーをバランス良く配置するためにも、新しい教員アドバイザーの確保が必要であるといえる。

2 つ目は、学びサポート企画部の学生とアドバイザーとの関係が希薄であり、連携が十分とれていない点である。まず第一に、学びサポート企画部の学生が、アドバイザーの専門や担当授業を把握する必要がある。しかし、現状としての双方の関わりは、相談記録シートによるコメントのやり取りのみである。SSS の相談対応を行うアドバイ

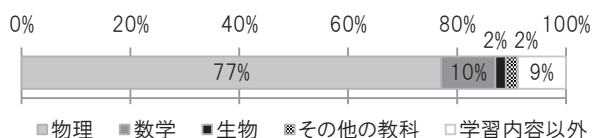


図 1 2019 年度前期の相談内容の内訳 (N=362)

ザーと SSS の運営を行う学びサポート企画部のメンバーと一緒に SSS の課題について議論する機会や関係を構築することも必要である。双方が連携することで、SSS のニーズ把握、より効果的な広報が実現できるのではないだろうか。また、学びサポート企画部が開催する学習関連のイベントでもアドバイザーと連携することで、より多くの徳島大学生に対して、大学での学びについて考える機会を提供することにも繋がると考える。

5. SSS 充実に向けた取り組み

以上の課題を踏まえ、SSS の充実にむけて今後取り組むこととして、学習相談ニーズ把握、SSS 紹介リーフレットの作成を挙げることができる。

ニーズ把握については、主に SSS を利用している 1 年生が日々の学習において、躓いている箇所や、アドバイザーに相談してみたいことについて、アンケート調査を実施することである。この結果を踏まえて、新しいアドバイザーの確保についても検討することができる。SSS 紹介リーフレットは、学びサポート企画部の学生がアドバイザーにインタビューを行い、アドバイザーの紹介や SSS の成果を掲載する。これを通じて、学びサポート企画部の学生とアドバイザーとの関係づくりができ、広報面でリーフレットを活用することで、SSS の利用者拡大につながることを期待できる。

参考文献

- 1) 長澤多代 (2013) 「主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能」、京都大学高等教育研究、19、99-110。
- 2) 佐々木奈三江、亀岡由佳 (2018) 「学生・教職員と共に創る学習支援の場としての図書館」、大学図書館研究、110、2023-1-11。
- 3) 呑海沙織、溝上智恵子 (2011) 「大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義」図書館界、63(2)、176-184。
- 4) 学びサポート企画部ホームページ
<https://www.tokushima-u.ac.jp/cue/sca/team/sss/> (2019年11月1日閲覧)
- 5) 本田剛士、下村宗央、畑中唯菜、片山裕之、枝川恵理、亀岡由佳、吉田博 (2016) 「徳島大学の教育・学生の学びに与える Study Support Space のインパクト」、平成 28 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、10-11。